

## カイサ設立時から働く

短期間で習得した。

報をインターネットで一五もの言語により提供するもので、カイサが長年にわたりコンテンツやシステムを整備してきた。そ

アハメド・アカールさんに初めて会つてもう五年ちかくになる。当時、ヘルシンキ市の多文化交流センター・カイサで文化事業担当の職員をしていた彼は、多文化主義と公平性を行政指針とするヘルシンキ市が施設の長に外国人を採用しないことを嘆いていたのを思い出す。今回アカールさんに会つた目的は、昨年カイサの所長に着任した彼にそのいきさつを直接聞くことにある。

チニシア出身のアカールさんはフィンランドに来たのは一八年前、難民や労働移民が大量にヨーロッパに流入していたころである。しかし、彼の場合はそのいずれもなく、当時留学していたパリで知り合つた今の奥さんになる女性についてきたのがきっかけであった。一九八〇年代末のフィンランドはフランスなどに比べ、まだ町の景観に外国人の存在を感じさせるものは少なく、社会全体が文化的モノトーンによって支配されていた。人びとの刻すような視線も気になつたようだ。フィンランド語はわからなかつたが、あるときバスのなかで投げかけられたことばが、外国人への軽蔑のことばであつたことは理解できた。そんな国に残ることになつたのは自分でも不思議だが、その言語には興味がわいたという。

## 外国人として生きる

# 「宝くじにあたつたのはどっち？」

庄司 博史 (しょうじ ひろし)

本館民族社会研究部

おりしもフィンランドは外国人の急増に対処するためさまざまな法や行政上の整備をおこなつており、自治体も、彼らを住民として受け入れる具体的な施策に迫っていた。外国人のほぼ五割が居住するヘルシンキが、外国人との多文化交流をめざして一九九六年設立したのが多文化交流センター・カイサであった。母語のアラビア語にくわえ、英仏語の他、いくつのかのヨーロッパのことばが話せるアカールさんは臨時職員に採用された。こうして彼はカイサ設立時からその成長に付き合うことになつた。自分ほどカイサを知る人はほかにいないという所以である。

カイサの代表的な活動で彼が深くかかわってきたものは少なくない。そのひとつが、恒例となつた移民の歌謡コンテストであるアワヴィジョンである。これは一五〇人の参加者が春の決勝大会に至るまで勝ち抜いていくコンテストで、最終の決勝大会は一五〇人の観客を集める大規模行事となつていて。興業としても成功するほか、マスコミにも注目されプロ歌手も出るようになつた。もうひとつは外国人のための多言語情報サービスであるインフォ・バンクである。これはフィンランドの音楽ファンにかかるあらゆる生活情

は暗いものではない。フィンランドは世界に誇れる多文化主義に基づく移民統合法、平等法をもちそれを政策で行使しつつある。今の子どもたちは移民も多数派もこのよだんな主張を積極的に発言してきた。

一方で、社会が居ながらにして、さまざまな文化やことばに触れ、世界と向き合えるきっかけを外国人が提供しているという現実はほとんど無視されているといふのである。

一方で彼は、外国人の社会への甘えに対しても厳しい意見をもつている。社会適応の困難や偏見はあると

さまざまな分野に進出し影響をおよぼすことのできる人びとに育つていくことに期待できるといふのである。

ところが、会話のなかで、アカールさんが「いずれここでも移民出身の国会議員が「生まれるに違いない」といつたことはが氣になつた。わたしには、それが自分の決意を語つたように思えてならないのである。

## 移民一世に希望を託す

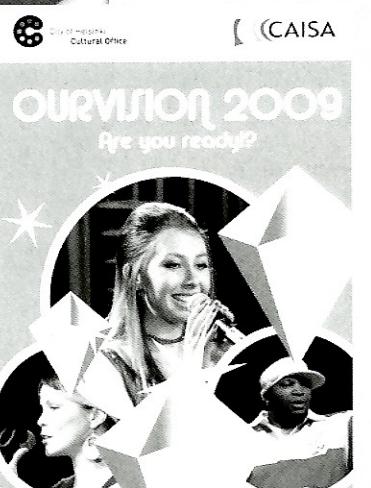
とはいえたアカールさんの将来への展望



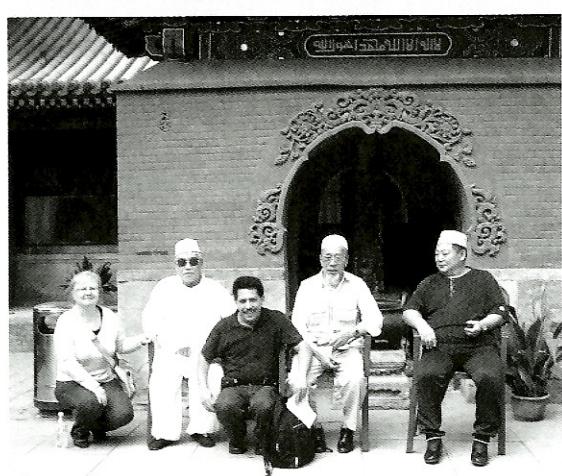
今年春のアワヴィジョンのパネル展示の前で。コンテストには日本人(パネル右)や中国人(左)も参加したといふ



カイサのスタッフと相談するアカールさん。スタッフには外国人も多く常勤採用されている



来年のアワヴィジョン(OURVISION) 参加者募集のちらし。名称はヨーロッパで人気のあるソングコンテスト ヨーロヴィジョンにヒントをえたといふ



個人的には中国の文化のファンであるアカールさんはしばしば中国をとどまる。回教モスクのまえで、左端は奥さん